

活動報告：ミュージックチャイルド

活動の内容

「ミュージックチャイルド」は、平成22年10月より、特別な支援を要する幼児、小学生を対象とした音楽療法活動を実施してきた。音楽学科専任講師である狩谷美穂と重信真由美（非常勤講師）の2名が担当し、前年度に続き火曜日と土日に希望者と面談後、音楽療法を提供した。平成23年4月からは、音楽療法士の資格科目の一つである「音楽療法実習Ⅰ」の実習先として、子ども子育て支援センターで行われている「ミュージックチャイルド」の活動を音楽学科2年生12名に見学させた。さらに、平成24年4月からは、3年次履修科目である「音楽療法実習Ⅲ」の実習現場として音楽学科3年生11名に現場実習を行わせ、学外実習施設の一つとして本格的な機能をスタートさせた。

「ミュージックチャイルド」の目的は、音楽のもつ生理的・心理的・社会的作用を用いて、生活の質の向上を目的とした音楽活動を意図的、計画的に行うことにより、子どもの発達を支援するものである。「ミュージックチャイルド」では対象児の行動の変容や発達の促進を引き起こす手段として音楽を仕様し、対象児の発する音楽表現やその他の表現をくみ取り、より望ましい表現や行動に向けて促す音楽活動を行っている。

「ミュージックチャイルド」の実践

「ミュージックチャイルド」で行う音楽療法活動は前年度同様、インテーク面接をはじめとし、アセスメント、目標設定、実施計画の作成、セッション、保護者とのカンファレンスの流れで実施された。実施時間は個人セッションの場合は30分、グループの場合は45分であるが、終了後の保護者との面談やセッション後の簡単な振り返りを10～15分間行っているため、1セッションにつき概ね60分必要となっている。

22年度の活動については、前期18回、後期20回の合計38回のセッションが行われた。参加した児童の人数は8名で内4名は個人セッションであった。参加児童の年齢、性別、障害は次の通りである。2歳児2名、6歳児3名、10歳児1名、11歳

児1名、12歳児1名の計8名のうち4名が女児で4名が男児であった。それぞれの児童が抱える障害は、自閉症、てんかん、重度知的発達遅滞、広汎性発達障害、学習障害、知的障害であった。

音楽療法実習施設として

「ミュージックチャイルド」は、平成23年4月より音楽療法の実習施設としての機能を開始した。音楽学科2年次履修科目である「音楽療法実習Ⅰ」は、5名の教員がオムニバスで担当する科目である。内容は、学内にて対象者理解及び実践現場についての事前学習を行った後、それぞれの教員が学外で行っている音楽療法セッションを実際に見学するというものである。「ミュージックチャイルド」もその現場見学実習の1つとして、学生は重信真由美非常勤講師が行う音楽療法セッションを見学した。履修した学生12名は音楽療法演習室で行われるセッションを、隣室からマジックミラー越しに見学し、観察記録を行った。

「音楽療法実習Ⅰ」の目的は、多種にわたる音楽療法の実践現場や音楽療法士の臨床スタイルを見学し、3年次に行う学外実習に向けての基礎知識を習得させることにある。12名の履修学生は、2人1組となり個人セッションとグループセッションを1回ずつ見学後、客観的及び主観的の2種に分けた記録と感想を記述し、担当教員よりフォローアップの指導を受けた。セッションを見学した学生達は様々な障害を抱える子ども達の音楽反応に驚きながらも、音楽の作用と活用法についてのアイデアを多く習得することができたと考えられる。また、「ミュージックチャイルド」は、多施設ではあまり見ることができない個人セッションを見学することができる貴重な現場であると共に、保護者との関わり方や、セッションの目的などを保護者に説明する方法などの重要事項も学ぶことができたと確信する。

改善点と将来構想

現在「ミュージックチャイルド」の音楽療法を受けている子どもとその保護者は、子どもの様々な機能の発達と変化を見ることができると満足している。障害があるため、「できない事」が目立ってしまう日常生活の中、子ども達は自由に自己表現しセラピストに受容、肯定されることにより、

子ども達が本来の自然な状態で人と関わることのできる豊かな体験となっている。音楽療法を受けさせたいという保護者からの要望も強く、今後も音楽療法を提供する数少ない現場の一つとして重要な役割を果たすことが望まれる。

しかし、今後の継続についての問題点もあげられる。1つ目はセッション回数の確保を巡ったスケジュール調整である。音楽療法を受けている子ども達の多くは小学生であるため、土曜日を主なセッション日としているが、学校行事や体調などで急な変更を余儀なくされることも多く、あらかじめ定めた日程だけでは年間15回のセッション数確保が困難である。より柔軟で、急な欠席にも追加セッションなどで対応できるスケジュール設定の可能性を探る必要がある。

次に、「ミュージックチャイルド」での音楽療法を受けたいと希望する子どもの増加である。現在のところ、年間数件の問い合わせがあるが、継続を希望する保護者が多数のため、新たに受け入れできる枠がないという理由で断らざるをえない状況である。音楽療法先進国である米国と比較して、我が国では音楽療法を受けることができる機関はまだ少ないことから、「ミュージックチャイルド」の役割は大きいと考えられる。医学の進歩と共に障害を抱える子ども達が増加している中、障がい児を支援する体制の充実には期待が高まると思われる。より多くのニーズに対応できる新たな組織づくりも今後の課題である。

最後に、「ミュージックチャイルド」の活動は、設備の関係で学内の音楽療法演習室を使用しているため、あまり外部から目につくものではない。また、参加児童や保護者のプライバシーも考慮し、一般の見学者は受け入れていないこともあり認知度はセンターのその他の活動と比較して低いと考えられる。しかしセッションでは、教員や保護者は子ども達と真剣に関わり、子どもの個性と能力をのばすための音楽活動が行われており、保護者の満足度、継続希望と共に高い。また、見学実習を行った学生達にとっても、対象児理解と音楽療法、障がい児を持つ保護者の様々な心理状況や関わり方を学ぶ貴重な体験となった。今後も音楽による療育や音楽療法の先進国である米国などを参考にしながら、音楽療法を媒体とした障がい児と保護者への支援を継続し、音楽療法の可能性を発

信していきたい。

(文責：学芸学部音楽学科 狩谷美穂)